

② 横浜演劇文化の新たな可能性

■泉谷 渉

1 消耗する若者たちと横浜演劇の現場

「これ、次の私たちの公演なんです。ぜひ、見に来て下さいネ！」

今や、ヤング劇団のメッカとなつてしまつた横浜STスポットで、公演がはねた後、声をかけられ、チラシを少し見てから顔をあげると見知らぬ少女が、眼をキラキラさせてそこに立っている。ああ、私たちが十一年前はこんな眼をしていたのかもしれない、と思いつながら、横浜駅西口に向かう暗がりを歩いていたら、しかし、あの少女も一年先にはこの芝居の現場にはいないかも、と思ひとめた。

「ヨコハマをテーマ・イメージとした芝居づくり」を旗印に、私たちは一九八四年、劇団横浜にゆうくりあを創立、既に十一年目の活動に入った。本公演、実験公演をあわせ、三十回の芝居を打ち続けたことになり、右も左もわからない素人集団が、よくここまで続いたものだと思ひが強い。

不思議なことに十一年間を振り返れば、今なお活動を続ける人たちよりも、去つていった多くの仲間が思ひ返され、ああ、あの時アイツは本当に輝いていたな、とそのステージが鮮やかに脳裏によみがえる。

「人の出入りは、これは仕方がないことで

す」と先輩の劇団の人に言われてはいたものの、この十一年間で「にゆうくりあ」で活動した人は延べ八十人を数え、現在の団員数は二十人。ああ、寂しいものだなあ、とため息をつきながら、知り合いの劇団の公演に足を運べば、よく知っている役者はほとんどおらず、見知らぬ新人たちが舞台を闊歩している。演技はともかく、その新人たちの眼は一樣に輝いており、「私たちは、とにかく、ここで生きています」というその息吹が伝わってくる。

しかし、わずか数カ月後の次の公演では、その輝いている眼は既に舞台にはなく、別の見知らぬ新人が、あまりうまくない活舌で独言（モノログ）を続けている。ああ、この劇団もまた、私たちと同じような活動を繰り返しているのだと、やや暗い思いを胸に家路につく。それでも、まだ私たちは続いているだけでもよいのかもしれない、となぐさめにもならないつぶやきが胸にこみ上げてくる。

現在、横浜には七十〜八十の劇団がひしめいており、バブル崩壊後、元気がなくなつてきた東京の状況に比べれば「遅れてきた活況」を呈しているのかもしれない。しかし、その中身をよく見ていけば、実に「消耗していく若者たち」の姿が浮かび上がってくる。

横浜STスポット、相鉄本多劇場、さらには市内のいくつかのホールを拠点にしながら多くの劇団が生まれ、かつ、消えていく。三年以上続く劇団はまれであり、私たちが活動を始めからのこの十一年間にも、うたかたのように若い劇団が生まれ、気がつくくと、彼らの姿を見ることができなくなつてきている。確かに生まれたばかりの劇団は元気がよく、二〜三回のステージはチケットのコネ売りも

10周年記念公演「ヨコハマ・レイニー・ブルー」から



- 1 消耗する若者たちと横浜演劇の現場
- 2 けいこ場がほしい！切実な要望
- 3 組織されない観客層と演劇文化の貧困

- 4 東京への文化流出と横浜の持つ宿命
- 5 ネットワーク形成に前進し地元演劇の団結
- 6 来るべき前進に向けて提案

きき、また経済的に少々無理をしても公演を支えていくだけのエネルギーにあふれている。しかし、何回かのステージを重ねればチケットも売れなくなり、表現されているステージの歩どまりもトーンダウンしてきていきづまる。かといって、こうした若者たちを支えていくネットワークも少ない。もちろん、どこからも財政的な援助はなく、金のかかるステージを維持していくのは「P.O.R.」な若者たちにとって並大抵のことではない。

一方で、芝居に対する動機づけも少ない集団にとっては、公演を続けていく使命感も乏しく、やがては解散し、霧のようにこの現場からいなくなってしまう。もちろん、仕事ですら次々と転職を重ねる今の風潮にあつては「何かもう、芝居、つまんなくなってきたみたい」とか、あつさり言い捨てて、何か別のもので感動を得ようとする今時の若者のジブシー性を否定するつもりはない。しかし、そうしたジブシー性だけで、次々と劇団が生まれ、消えていく今の横浜の演劇状況を説明するわけにはいかない。

横浜で芝居をつくっていくこう、という若者たちのエネルギーは今も満ちあふれている。しかし、彼らはある何かの理由で、いたずらに空転せざるを得なくなり、継続した志を持ってなくなっている。芝居づくりに消耗するのではなく、芝居を支えていく環境があまりにも乏しいことに消耗していつているのだ。

2 一けいこ場がほしい〜切実な要望

芝居をつくっていく場合にまず必要なこと

は、何よりも創造していくというエネルギー、作品づくりの賛同し、協力していく人的な体制づくりがあげられよう。そして次には、けいこをしていく場の確保ということだが、残念ながら、この横浜においてはこれがなかなか難しい。働きながら演劇活動が続ける若者たちにとって、遅い時間まで安心して使えるけいこ場は、いわば必須条件といつてもよい。しかしながら、芝居のけいこが許されるスペースで午後十時まで行えるところは岩間市民プラザ（天王町）など二〜三カ所しかなく、公共の場があてにならない以上、かなりの金額を払って私的なスペースを借りざるを得ない、という状況がある。

数少ないスペースを除けば、ほとんどのけいこ場は有料であり、月々のけいこ場代はばかにならない。にゆうくりあの場合でいえば、少ない月でも三〜四万円、多い月で十二万円以上までけいこ場代がふくらみ、どこからも援助されていない以上、これらのコストは一人ひとりが負担していくのだ。好きなことをやっていると金がかかるのは当たり前だが、とおっしゃる向きもあるかもしれないが、湘南や東京には公共スペースで無料のけいこに使える場が多い、ということを知ってほしい。私たちの場合は幸いにして、常時二十人以上をかかえる組織を持つており、また、ありがたいことに公演に多くのお客様が来て下さることもあって、財政的には何とかこれまで維持してこられた。しかし、メンバーが四〜五人という劇団は数多く、その人たちの財政状況を考えた場合、大変なコストをかけて運営しているんだなあ、と思わざるを得なく、

経済的いきづまりから劇団を解散するケースも枚挙にいとまがない。

けいこ場は芝居をつくっていく上でのファンダメンタルな要素であり、このインフラが整備されていない現場において、七十〜八十の劇団がひしめいていて、こうしたことが続いていけば「消耗し、消えていく劇団」は後をたたないだろう。

3 組織されない観客層〜演劇文化の貧困

日本の平均的なサラリーマン像は、仕事をし、帰宅して枝豆、ビールに巨人戦、たまにカラオケもしくは居酒屋、と言われて久しい。最近はこのにじりぐが加わってきたのかもしれないけど、話題と言えばオウムにタモリ、たけし、りえちゃんというTV文化が浸透している一律性。これに比べて、欧米のアフターファイブの文化は、より多様性を持ち、かつ、個性的だ。もちろん、日本と同じように、即、帰宅してTV、パソコンという人たちはいる。しかし、多くの人たちは音楽ライブ、演劇のステージを平日の夜に楽しむ習慣を持つている。ディナーを楽しんでゆつくりとステージを見る。これを土、日に行うのではなく平日に行っているという点に注目しなければならない。

オーバーワークの日本人にとってそんなことは無理だ、とおっしゃるかもしれないが、経済的にいくら発展しても、こうしたステージ文化を市民が共有できないような社会は貧しい以外の何ものでもない。私はクラシック

音楽も好きで、よくコンサートにも出かけるが、平日の夜に行われるためか、会場はいつもお客さんの七〜八割が女性であることに今さらながら驚かされる。私たちのお芝居に足を運んで下さるお客さんについても、やはり七割以上が女性の方だ、という現実がある。こうしたことを憂える人はかなりいて、ある新聞で「クラシックコンサートの客が女性ばかりということが続く限り、日本は決して文化先進国にはなれない」と喝破している論者もいた。

先日、横須賀で開かれた小さな演劇シンポジウムの中で、元県立青少年センター副館長田村忠雄氏の講演を聞く機会に恵まれた。田村氏は先ごろ欧米の演劇を視察されたそうので、「イギリス・リバプールや、カリフォルニア・バークレーの芝居を見て驚かされた。そこには地域演劇という文化がみごとに屹立（きつりつ）している。人口わずか十万人という街において、三つの演劇シアターがあり、十カ月間公演を打ち続け、実に三万人を動員する。これらを推進していく人たちはみな市民ボランティアであり、また行政も市民と一体になって表現活動をバックアップしていく姿はまさに感動的であった」と述べている。

翻って、横浜市の人口は三百三十万人、地元で行われる演劇に足を運ぶ人はおそらく五万人にも満たないだろう。表現していく人たちのネットワーク形成がまだまだ、ということもあるが、それ以上に演劇文化を市民として形成していくというエネルギーに欠けていて、その意味で横浜の場合、観客は全く組織化されていない。

4 東京への文化流出と横浜の持つ宿命

横浜において地域演劇が成立していないか、もう一つの要因は、観客が多く東京に流出してしまおうということにある。これは、流通の現場などにおいても言われることではあるが、演劇の場合はこれがますます激しい。おばちゃんたちにとって、芝居を見るということは「新橋演舞場で玉三郎」「日生劇場で平幹二郎」であり、若者たちにとっては下北沢本多劇場、新宿紀ノ国屋ホールに行くことがトレンドであると考えられる。大東京に隣接した横浜の悲劇がそこにある。

観客が流出するばかりではない。才能も流出している。高校演劇のレベルは、横浜をはじめ神奈川県下は全国でも屈指の高水準であるが、「地元にはあまりメジャーな劇団がない。それに地元には誇れるような演劇専用ホールがあまりない」という二つの理由で、才能のある人たちは多く東京に行ってしまう。

横浜にはプロ劇団がなく、この街の演劇文化は長い間にわたってアマチュア劇団がそれを支えてきた。アマチュア、つまり、他に生計となる仕事を持つ人たちや学生の人たちがその表現の手段として「演劇」を選び、それぞれの活動を展開してきた。しかし、資金的な裏付けもなく、けいこ場確保にも苦しんでいるアマチュアの人たちが活動できる範囲と力にはおのずから限界がある。

横浜にゆくりあが小さな存在ながら「何としても、ヨコハマをテーマ、舞台、イメージとした創作劇の展開」を掲げるのは、こう

した「東京流出」に歯止めをかけた、との一念からである。他にも「ヨコハマからの情報発信」を掲げる劇団もいくつか登場し始めている。ヨコハマ固有の演劇文化を形成していけば、必ずや横浜に足を運ぶお客さんが増えていくはずだ、とみな歯ぎしりをしながらがんばっている。しかしながら、芝居をつくっていくインフラ整備もなく、市民演劇という概念もなく、観客も組織されないこの現状にあつては、私たちの運動はなかなか前進しない。それでも「にゅうくりあは、いつもヨコハマに暮らす人たちを取り上げてくれるから面白い」と一公演に五百〜六百人の人たちが見に来て下さるのはありがたいことであり、この運動は決してまちがっていないと思っ

ている。

小劇場スタイル（五十〜二百人規模で、客と近く交わえるようなステージのスタイル）の芝居はまさに八〇年代、東京に多くの面白い劇団（夢の遊民社、第三舞台、第三エロチカ、ブリキの自発団、青い鳥など）が登場し開花、その前には唐十郎の状況劇場、寺山修司の天井桟敷がブームをつくった。この横浜において小劇場スタイルで公演を打てるスペースは横浜S T スポット（五十〜八十席）、相鉄本多劇場（百五十〜百八十席）、新横浜スペースオルタ（百五十席）などしかなく、これも東京流出に拍車をかける原因となっている。しかも、これらのスペースはいずれも純然たる公共のホールではなく、使用料金も決して安いとはいえない。それでも、芝居に情熱をかける若者たちはこれらのホールでかなり無理をして公演を打ち、燃焼し、そして消

「ヨコハマはそよ風に乗って」から



耗していく。

5 ネットワーク形成に前進し、地元演劇の団結

こうした状況下にあつてなお、横浜およびその周辺における演劇文化を向上させていこう、という運動が盛り上がってきた。まずは相鉄本多劇場の経営危機に端を発し、これを逆手にとつていろいろなイベントをしかけていこうということで「横浜劇場文化フォーラム」というゆるやかなネットワークが形成された。ここには相鉄本多を中心に活動するにゆくくりあ、劇派事ム所、PECT、河童座、横浜LOVE物語などの劇団が集結し、定例会をもつ一方、火曜シアターの開催、連続シンポジウムの開催などを主催し、共同事業に取り組んでいる。

また、昭和二十年代にあいついで設立され、現在もきつちりとした活動を展開している「横浜アマチュア演劇連盟」の活動も再び活発になってきた。ここには、麦の会、かに座、横浜小劇場、蒼生樹、ぶどう座の五劇団があり、この十月にテアトルフォンテで「'95横浜演劇祭」という合同公演を行い、気を吐いた。(この演劇祭のPART2は麦の会と横濱にゆくくりあジョイント公演というかたちで、「戦後五〇年をふりかえる」をコンセプトに十一月二十四日～二十六日、相鉄本多劇場において上演が決まっている。)

この横浜アマチュア演劇連盟のメンバーを

核にしながら、川崎の京浜協同劇団、小田原のこゆるぎ座など県下の劇団を多くネットワークする「神奈川県演劇連盟」の活動も見逃せなくなつてきた。この連盟は長い間、活動が不活発であつたが、ここに来て横濱にゆくくりあ、劇派事ム所など数劇団が新規加盟し、現在十四劇団のネットワークを形成している。定例会を開く一方、共同フェスティバルの企画、ニュースの発行などを通じ、市民への演劇普及に注力している。しかし、STSスポーツを中心に現れては消えていく若い劇団をまだ組織化できないのが現在の悩みだ。

6 一来るべき前進に向けての提案

神奈川県は、この県演劇連盟に対し助成金を毎年供出しているが、その額は驚くなれわずか百二十万円である。これを十四劇団で割れば、一劇団あたり八万円強とお寒い限りだ。一方で、県民ホールで行われるメジャーのオペラなどに億単位の金が使われている現状を見るに、少し納得できない、との思いがどうしても強い。本気になって地元の演劇文化を育てていこうとの姿勢が現れている予算措置とは到底いえない。そこで、先ごろ神奈川県演劇連盟(理事長 飯田克衛)として、せめて五百万円の予算をつけてもらえないかとの要望書を岡崎県知事あてに提出した。お隣の静岡県は「財団法人静岡県舞台美術センター」を先ごろ創設し、舞台芸術の振興に本格的に取り組むことを決めている。芸

術総監督制の採用をはじめ、劇団員や舞台技術者など芸術活動に携わるスタッフを専属で備え、オリジナル作品の創作や人材育成、舞台芸術の国際交流などの推進をめざすという。実に、このために二十億円の予算措置がとられた。別枠で、野外劇場の建設、実験的演劇のためのアトリエ、けいこ場、資料室、宿泊研修施設など(これらは無料または少額で使用できるといふ)を新設し、九七年度に完成させていく。こうした試みは、既によく似たケースとして兵庫のピッコロ劇団、東京都北区のつかこうへい劇団などで実現しており、まさに行政が市民と一体となって演劇文化を創出していこうという姿勢の現れである。

横浜および神奈川の状態については、こうしたことがすぐに出来るとは思えない。しかし、将来に向けて演劇シンポジウムの開催、県下、市内各劇団との対話集会を通じて、徐々にコンセンサスを形成していくことはできる。まずは、人と人が出会うことからすべては始まるのだ。あせらずじっくりと、地域演劇をこの横浜において構築していくために、各演劇人、行政、さらには企業を含めての話し合いが多く必要であり、その中でオピニオンが盛り上がってくることを期待してやまない。

ギリギリとした演劇少女の眼がその輝きを失わないうちに、中身のある「横浜演劇文化」を形成していかなければならない。

△劇団横濱にゆくくりあ代表▽